

就学前教育における教材の研究(5) — 物語絵本の読みとりの過程 —

・天野久美子 秋場美智子 安藤智恵子 小池栄子 中村悦子
 (瑞穂野保育園) (栃木県身体障害者医療福祉センター) (釜井台幼稚園) (大妻女子大)

〈研究の目的〉

絵とことばによって人間生活の本質が表現されている物語絵本をどのようにして子どもたちに与えていくかという問題は、生活現象の本質をどのように理解させていくかということであり、そこには体系的な導入(カリキュラム)と、ステップを踏んでの段階的な指導(読みとりの過程)とが含まれている。これまで、絵本導入のために、絵本の構造(特質)の分析、実践過程の分析を通して、カリキュラム構成のための視点・留意点を述べてきたので(保育学会第34~35回)今回は後者に焦点をあてて、深い読みとりが可能になるための指導過程について考察する。

〈読みとりの水準〉

子どもは、ことばと絵を手がかりにして、物語を理解していくわけであるが、物語絵本が芸術として存在し、かつ典型的なかたちで人間生活の本質が表現されていることを考えると、単にそこに述べられている事柄(事件)を理解するだけではなく、記述されている事柄の背後にある内的意味・動機についての理解を深め、作品のテーマや作家の理想に触れるということが必要となる。幼児期においては、言語能力・理解・認識の仕方個人差があるため、自然な読み(子どもの自由な受容)においてはたとえ繰り返し絵本が提示されたとしても、読みとりの水準はさまざまであり、内的意味や動機まで理解されているとは限らないことがある。従ってある一定の水準まで子どもたちを導くとすると、読みとりの水準を設定し、そこで子どもに何を理解させるかということをはっきりしておくことが要求されてくる。表1は、読みとりの水準をまとめたものである。

表1 読みとりの水準

	読みとりの水準	内 容
表面的な読みとり	外的意義の理解	絵を手がかりとして、記述されている事柄を受けとめる。
思考的・感性的な読みとり	内的意義の理解	事柄と事柄との関係を結びつけて、ことばの奥にある意味をとらえる。
	動機の理解	登場人物の行動の背後にある動機、作品をかかせた作家の動機をとらえる。

〈指導の展開〉

1 絵本読みの段階

絵本読みの指導段階として、導入の段階、読みとりの段階、理解の段階、総合読みの段階が考えられる。
 ☆ 導入 — 読みとりができるための絵本に取り組み姿勢づくりがねらいとなる。子どもが絵本と正面を向いて取りくむことができるようにするためには、予備的情報を与えて、動機づけを図ったり、読みの目的を明確にしたりする。

☆ 読みとり — 物語の内容を自己の経験をもとに感情のレベルで情緒的に受容できるようにすることがねらいとなる。耳から入ってくる音声言語を目に映る絵画表現をもとに想像性を活発にして、物語の展開を理解し、情緒的に受容できるようにするためには、読み方の工夫が必要となる。ことに音声言語上から得る内的意義がとらえられるようにするためには、間のとり方、イントネーション、感情のおき方等を考えていかなければならない。

☆ 理解 — 個人の経験を捨象して、物語を分析し、構造的に理解して、物語の本質に接近できるようにすることがねらいとなる。保育者が物語のポイントとなる点をどのように把握するかで、物語の本質へのアプローチも異なってくるので、絵本の教材研究が重要な意味をもってくる。

☆ 総合読み — まとめとしての読みであり、物語をより感動的に受容できるようにする。

2 絵本の特質と読みとり

絵本は童話と異なり、絵があるゆえに物語の理解を容易にしている反面、ことばによってではなく、絵によって人物の描写、事件の原因・理由が説明されている場合には、想像力を働かせて、それらの事柄を解釈していくことが読み手に要求されるため、深い読みとりまでをと考えた時、子どもにとっては非常に難しくなる。従って、子どもがたやすく物語のテーマや本質に近づけるようにするためには、保育者が絵本をよく読み、理解のポイントとなる点をとらえ、保育者の意図を明らかにしておくことが必要となる。1冊の絵本であっても保育者の絵本の読み方によって指導の展開は大きく異なってくる。表2は特色のある絵本を2冊選び、絵本の特質と指導過程(読みとりの過程)を

表2. 絵本の特徴と指導過程

絵本	特徴	テーマ	指導のポイントと留意点	事柄・人物の関係
ゾゾオのかんむり	人物(動物)の特性や、人物と状況との関係がこぼによって描きだされているので、一定のイメージをえがきやすい。	一人ぼっちで、さみしいライオンの王様が、ヒリと仲よしになり、楽しくする。	<ul style="list-style-type: none"> 強いもの(ライオン)と弱いもの(ヒリ)が共存することのなかに、いたわりとやさしさがうまれてくることわかる。⇒このことは抒情的雰囲気をもって描きだされているので、読み手の工夫が必要。 主人公の特性が、物語の初めの部分で述べられているので、ことばに注目させる。 	<p>(ライオンの王様 — 誰も近 ずかない — 話す相手が いない — 老いてきた)</p>
かいじゅうたちのいるところ		腕白少年が叱られ罰を受けながらもメソメソすることもなく、空想の世界で怪物たちと楽しく遊ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> 腕白だが困った場面に出会ったときに自主的に行動し、問題を処理する少年像をとらえる。⇒叱られたときの経験と対照させて主人公の行動を理解させ、少年像に接近していく。 現実—空想—現実の物語構造の理解⇒どうしてかなという疑問・不思議さから導いていく。 	<p>現実 → 空想 → 現実</p>
		いつも気の弱い少年がおおまのぬいぐるみを着ることで、元気のよい少年へと変身し、空想の世界で怪物たちと楽しく遊ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> 強くなりたいという子どもの願望があり、ぬいぐるみを着ることでその願望が達成させられるということを理解する。⇒ぬいぐるみを着ることで、焦点をあて、着たときにどのような気持ちになるかを想像させる。 現実—空想—現実の物語構造の理解⇒どうしてかなという疑問・不思議さから導いていく。 ぬいぐるみを脱いだあとの少年像を想像させる⇒自由にイメージをえがかせる。 	<p>現実 → 空想 → 現実</p>

まとめたものである。「ゾゾオのかんむり」(岸田 衿子作・中谷千代子絵 福音館書店)のように人物の描写、事件の背景が言語の記述によって設定されている場合は、比較的、物語の内的意義、動機は理解しやすいが、「かいじゅうたちのいるところ」(モーリス・センダック作・じんぐうてるお訳 畠山房)のように条件設定がない場合は、テーマのとらえ方の違いによって、物語の構造が異なってくるので、理解の難易度にも影響してくる。

3. 子どもの発達と読みとり

これまで述べてきたことは、深い読みとりを可能にするための理論であり、どの年齢の子にもその通りに実施しなさいということの意味していない。保育

者の意図、絵本の特徴、並びに子どもの発達に応じて読みとりの水準を考え、指導段階を構成していかねければならないことはいうまでもない。一般的には、年少の場合は絵本を楽しむということが中心となるので、表面的な読みとりとなり、年長になるに従って内的意義や動機の理解へという思考的・感性的な読みとりと進んでいくことが考えられる。ただ表面的な読みとりであっても、その中にはその年齢なりにとらえた内的意義や動機は含まれているので、全く表面的ということではない。保育者が意識して、子どもが構造的に理解しようとすることを援助するとするならば、4才児クラスの中頃から始めることが望まれよう。